

シンポジウム

リカバリー志向サービスへの転換

～当事者参加による社会的意思決定PART2～

コーディネーター：大島巖、宇田川健（NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

今年のシンポジウムの趣旨は、精神保健医療におけるリカバリー志向サービスへの転換のためには、当事者参加による社会的意思決定、具体的には今回、当事者の行政の委員会などでの発言が生かされることは不可欠であるということと、精神科病院の病棟転換型居住系施設政策での当事者の発言が生かされなかったのはなぜか、ということでした。

シンポジストは、発言順に、川の郷福祉会の竹内政治さん、NPO 法人スペースぴあの木村潔さん、株式会社 MARS の高橋美久さん、日本社会事業大学大学院博士後期課程の澤田優美子さん、指定発言者は基調講演を行ったニューヨーク市健康・精神衛生部リハビリテーションプログラム・ディレクターのユミコ・イクタさんでした。今年のシンポジストはそれぞれ、国レベル、都道府県レベル、市区町村レベルでの政策立案・決定の審議会や委員会に入っている、または入った経験のある当事者や家族の方々です。

シンポジストから出てきた意見では、行政での検討会、委員会、審議会では、意見は言えるがそれが政策に反映されないというパワーバランスの問題、意見は言えるがはじめから結論ありきの話し合いだったという審議会制度の制度上の問題が出され、でも声を上げ続けなければならないという意見でした。特に病床転換型居住系施設の問題に関しては、実際に長期入院を体験してきた当事者性を濃厚に帯びた人でないと、想いを伝えられないのではないかという意見が出されました。また精神保健分野では、他の障害に比べ、当事者運動自体に力がまだない、当事者全体が力をつけるために、教育を導入するべきではないかという意見も出されました。

フロアとのやり取りでは、実際に委員会に参加している当事者や当事者性をもった人からの報告や、ピアサポートの重要性、審議会制度という制度そのものの問題や、当事者の発言がいかにかに生かされてこなかったかという発言が多くありました。当事者の組織化も必要という意見もありました。

指定発言者のユミコ・イクタさんからは、当事者の意見を反映させるための工夫として、以前はアメリカでも人々や団体が結集しないうちには、何も起こらなかったことが話され、その後、戦略的にすることが必要で、まず計画的に精神保健の政策決定に影響をもつ人に対し、何度も繰り返し、別々の団体が協力して優先順位をつけて同じことを訴えて行くこと、統計やコスト圧縮などの資料をもって伝えることをして、初めて政治や行政は動くということでした。メディアに前もってどんな運動を展開するかを伝えておいて、取材してもらうことも必要だということでした。

最後に座長のコンボの大島巖さんから、まとめと、制度上の問題として、行政からも考えを聞くべきで、当事者に対する教育についても、より賢く相手のことを知ってやっていく必要があります、また審議会などで、ピアサポーターをどう活かしていくかがこれからのリカバリー全国フォーラム全体を通しての鍵となるという発言がありました。

《宇田川健（NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）》